

大学生のアイデンティティとその関連要因

著者	松島 るみ, 尾崎 仁美
雑誌名	京都ノートルダム女子大学研究紀要
号	43
ページ	1-13
発行年	2013-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1057/00000154/

大学生のアイデンティティとその関連要因¹⁾

Factors Relating to the Sense of Identity in University Students

松 島 る み

MATSUSHIMA Rumi

尾 崎 仁 美

OZAKI Hitomi

Previous studies have investigated the relationship between the sense of identity and students' motivation for university life. However, there is little agreement on how identity achievement affects students' academic motivation and attitudes toward their classes. The main purpose of this study was to examine the relationship among the sense of identity, academic motivation, attitude toward their classes, university satisfaction and career consciousness using a longitudinal study. A questionnaire package that comprised the Multidimensional Ego Identity Scale (Tani, 2001), the Scale of Students' Attitude toward Classes (Ozaki & Matsushima, 2009), the Academic Motivation Inventory (Wada, Morimoto, Yamauchi, Hishinuma & Hurukawa, 1998), the scale of Students' Attitude toward University (Ozaki & Matsushima, 2009), the Scale of University Satisfaction (Yoshimura, 2004) and three items about career consciousness was administered three times to women's university students from July 2009 in a three year longitudinal study. Results indicated that the sense of identity was significantly correlated with students' attitude toward their classes. We assumed that students with the sense of identity would have a positive attitude toward their university classes. In addition, the sense of identity was positively correlated with academic motivation, university satisfaction and career consciousness. These results suggest that students with a sense of specific purpose and a goal in university life have high academic motivation and high university satisfaction. However, the factors relating to the sense of identity varied for each year level.

問題と目的

青年期後期にあたる大学生は、Erikson の漸成発達理論において第V段階にあたり、「自我同一性 (identity) 対 自我同一性拡散 (identity-diffusion)」が発達課題とされる。アイデンティティを確立していく大学生にとって、アイデンティティ²⁾のあり方が、学業や授業への態度や

¹⁾ 本研究の一部は、日本心理学会第76回大会で発表された (松島・尾崎, 2012; 尾崎・松島, 2012)。

²⁾ 本研究では、「アイデンティティ」という表記の他、「自我同一性」という表記を使用するが、同一の概念を意味している。

意味づけ、大学満足感に影響したり、逆に学業や授業への取り組みや意味づけ、大学生活における様々な活動・経験が、アイデンティティの形成や確立に影響を及ぼすという循環的な因果関係がみられるものと推測される。水間（2006）は、大学における専門教育の学習過程を左右する学生の要因として、個人のアイデンティティ発達の観点から検討している。その理由として、専門科目の学習は、既に一度選択したアイデンティティを強化、発展させるための実用的価値を有すること、大学生の時期はアイデンティティを形成していく時期であり、その発達課題を並行しながら専門科目の学習が進められる可能性が高いこと、学ぶということ自体がアイデンティティ形成ととらえられること、を挙げている。

ところで、大学生におけるアイデンティティと学業に関わる意識や態度の関連について、どのような検討が行われてきたのだろうか。尾崎・松島（2006）、松島・尾崎（2009）では、学年ごとに学習意欲に影響する要因が検討されているが、必ずしも講義内容や専門科目への興味など、授業要因が示されただけでなく、将来の目標の有無や自身の適性、進路に対する迷い等、アイデンティティに関連すると思われる要因が学習意欲を左右することが示唆されている。

アイデンティティと意欲低下傾向・動機づけの関連については、複数の先行研究で検討されてきた。鉄島（1993）は、アパシー傾向を「授業からの退却」「学業からの退却」「学生生活からの退却」に分け、アイデンティティの未確立が「授業からの退却」、「学生生活からの退却」に影響を及ぼすことを明らかにしている。また、Faye&Sharp（2008）は、アイデンティティと学習意欲の関連について、アイデンティティが有能感を媒介して学習意欲に影響することを示している。一方、白石・岡本（2005）や下山（1995）は、アイデンティティ発達と「学業意欲低下」「大学意欲低下」の関連を明らかにし、アイデンティティが確立していない者ほど、勉学への興味を失ったり、大学キャンパスへの所属感が無い等の傾向がみられることを明らかにしているが、授業領域に関しての意欲低下を示す「授業意欲低下」との関連は示されなかった。さらに、小林（2010）についても、アイデンティティのあり方は授業意欲低下と関連しないことが明らかになっている。

この様に、アイデンティティと大学生活に関する意欲との間にはある程度一貫した関連がみられるものの、学業や授業に対する意欲との関連については必ずしも一貫した結果は得られていない。しかし、大学生活における一義的な活動である学業は、大学生活と切り離して考えることは出来ず、アイデンティティと学業・授業の意欲には関連がみられると考えるのが妥当であろう。Berzonsky & Kuk（2005）は、アイデンティティを獲得している者は、学習目的を確立し、自律的な学業に対する態度を持つことを示しており、Berger（1998）やBerzonsky（1989）も、アイデンティティの確立が学業での成功には不可欠であることを明らかにしている。これらの研究からも、アイデンティティの形成・確立と学業や授業に対する意欲、意味づけとの間には関連がみられると推測される。

さらに、アイデンティティと大学生活との関連については、意欲低下（下山，1995；白石・岡本，2005）や学生生活の満足感や充実感（大野，1984；仲野・壺井，2008）、友人関係（松下・

吉田, 2009)、自己形成 (山田, 2004)、コミュニケーションに対する自信 (畑野, 2010) 等、様々な観点から研究されてきたものの、大学生活に対する意味づけや大学満足感との関連について、十分に検討されているとは言い難い。どの様な大学生生活の過ごし方が、アイデンティティの形成を促し、またアイデンティティを獲得していることにより、大学生活にどの様な影響があるのかについて示唆を得ることは意義があるだろう。そこで、アイデンティティと大学観、大学満足感、進路意識等との関連についても検討し、学業・授業の側面と併せて、大学生のアイデンティティに関連がみられる要因を明らかにする。

谷 (2004) は、Erikson のアイデンティティに関する考えを整理し、「斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が、まわりから見られている社会的な自分と一致するという感覚」と定義している。この Erikson におけるアイデンティティの考えとは、①自分自身の斉一性・連続性と他者に対して自分をもつ意味の斉一性・連続性が一致するという感覚である、②自我同一性の感覚には、自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあるという感覚、すなわち、心理社会的同一性の感覚が含まれる、③自我同一性の統合が行われるのは青年期である、と大きく3点に要約されている (谷, 2008b)。谷はこの様な Erikson の考えを意識し、第V段階 (青年期) の自我同一性に焦点を当て、多次元から分析することの重要性を明らかにしている。そして、アイデンティティの感覚として「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「対自的同一性」「社会的同一性」の多次元により尺度構成をした (谷, 2001)。さらに、この4次元の構成概念は、「中核的同一性」と「心理社会的自我同一性」の2つの層に大別されるとしている。「中核的同一性」とは、「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」から構成され、コア・アイデンティティ³⁾を基礎に形成される層である。また、「心理社会的自我同一性」とは、「対自的同一性」と「心理社会的同一性」から構成され、主に青年期の心理社会的危機において現実・社会に接触・直面することによって形成されるアイデンティティ感覚である (谷, 2008a)。

本研究では、大学生のアイデンティティに焦点を当て、学業に関する諸変数を中心に、大学観や大学満足感、進路意識等、大学生活全般の諸変数の関連についてそれぞれ検討する。また、筆者らは、大学生の学習意欲を規定する要因には学年共通の要因に加え、学年独自の要因があることを明らかにしており (尾崎・松島, 2006)、鶴田 (2001) も、「学生生活サイクルの視点」を提唱し、大学生の学年移行に伴う心理的課題の変化を軸として、大学生を理解することの重要性を示唆している。このことから、本研究では、学年特有の要因や発達の視点を重視し、1年次から3年次の結果を比較検討する。

³⁾ 佐方 (2004) によると、コア・アイデンティティとは、マラー (Mahler, M.S.) の理論に基いたもので、乳幼児期の分離—個体化過程において、自己の個性性と自己概念の安定性および情緒的な対象恒常性を獲得することで、アイデンティティの核を確立していくとされる。青年期に形成されるアイデンティティは、これを核にして結晶化したものと考えられ、コア・アイデンティティが脆弱なら、様々な面でアイデンティティの病理が顕在化せざるを得なくなる。

目 的

本研究では、大学生を対象に、アイデンティティと大学授業観、学習意欲の関連について検討することを第一の目的とする。加えて、アイデンティティと大学生活全般の諸変数、具体的には大学観、大学満足感、進路意識との関連についても併せて検討することを第二の目的とする。本研究では、学年ごとの比較検討も行い、大学生の学生生活サイクルの観点からも考察を行いたい。

方 法

調査時期：2009年7月、2010年7月、2011年7月に、心理学の講義時間を利用して、質問紙調査を実施した。

調査対象者：2009年度に心理関係学部に入学者女子大学生が対象となった。3回の調査における対象者人数は、それぞれ、112名、109名、72名であった。

当初は、大学1年生から3年生までのデータに基づき、縦断的な分析を行う予定であったが、3回の調査に全て参加した者のみを対象とすると、対象者の人数が少なくなったため、ここでは、各調査時期に参加していた者全員を対象にし、厳密な縦断的調査とはしない。

調査内容：

1. アイデンティティ

谷（2001）により作成された多次元自我同一性尺度（MEIS：Multidimensional Ego Identity Scale）20項目を使用した。本尺度は、青年期における同一性の感覚の構造を測定することを目的としたものであり、4因子（自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性）から構成される。「自己斉一性・連続性」は、自己の不变性および時間的連続性についての感覚、「対自的同一性」は、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚、「対他的同一性」は、他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚、「心理社会的同一性」は、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を示している（谷，2001）。各項目について、「あなたに最も当てはまるものを選んで下さい」と教示し、「非常に当てはまる（5）」～「全く当てはまらない（1）」の5件法で回答を求めた。

2. 大学授業観

尾崎・松島（2009）で作成された大学授業観尺度45項目を使用した。4因子（視野の広がり・出会い、義務・退屈感、知的好奇心、自己成長）から構成される。「あなたにとって大学の授業とはどのようなものですか」と教示した。各項目について、「あなたに最も当てはまるものを選んで下さい」と教示し、「非常に当てはまる（5）」～「全く当てはまらない（1）」の5件法で回答を求めた。

3. 学習意欲

和田・森本・山内・菱沼・古川（1998）のうち、学習意欲についての9項目を使用した。各

項目について、「大学の授業に関して、現在、どの程度行っていますか」と教示し、「非常に当てはまる(5)」～「全く当てはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

4. 大学観

杉浦・尾崎・溝上(2003)による大学観尺度25項目を使用した。5因子(出会いの場・勉強の場・自分探しの場・将来準備の場・消極的モラトリウムを過ごす場)から構成される。各項目について、「あなたにとって、大学はどの様なところですか」と教示し、「非常に当てはまる(5)」～「全く当てはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

5. 大学満足感

吉村(2004)による学生生活満足度9項目を、大学生用に一部修正して使用した。各項目について、「大学生活について、あなたに最も当てはまるものを選んで下さい」と教示し、「非常に当てはまる(5)」～「全く当てはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

6. 進路意識

卒業後の進路について、①どのくらい考えているか(進路検討)、②希望する進路を決めているか(進路決定)、③希望する進路に進むために何か行っているか(進路行動)を、それぞれ5件法で尋ねた。各質問について、進路検討は「よく考えている(5)」～「全く考えていない(1)」、進路決定は「具体的に決めている(5)」～「全く決めていない(1)」、進路行動は「行っている(5)」～「全く行っていない(1)」の5件法で回答を求めた。

結果と考察

1. アイデンティティと学業・授業に関する諸変数の相関関係

谷(2001)の因子構造を基に、多次元自我同一性の下位尺度得点が算出され、また大学授業観については、松島・尾崎(2012)を参考に、4つの下位尺度得点を算出した。さらに学習意欲については、全ての項目得点を合計し、項目数で割ったものを算出した(Table 1)。多次元自我同一性の尺度得点算出にあたっては、アイデンティティの感覚を持っている者ほど、得点が高くなる様に算出された。多次元同一性尺度の3年間の変化はFig. 1の通りである。20項目の合計点は学年と共に微増しており、18～22歳の大学生男女を対象に、学年が上がるにつれてMEISの合計得点が上昇することを示した谷(2001)の結果と同様であったが、本研究では統計的に有意な差異はみられなかった。また、下位尺度では、全ての尺度で上昇が見られるわけではなく、3年間を通して大きな変化はみられないことがわかる。3学年にほぼ共通して、より対自的で主観的なアイデンティティである対自的同一性、自己斉一性・連続性が、対他的で社会的なアイデンティティである対他的同一性、心理社会的同一性よりも高いという結果が得られた。

Table 1 学年別 アイデンティティ, 大学授業観, 学習意欲の記述統計

	1 年次 (n = 112)		2 年次 (n = 109)		3 年次 (n = 72)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
自己斉一性・連続性	3.34	0.99	3.36	1.02	3.35	1.02
対自的同一性	3.21	0.85	3.12	0.9	3.25	0.95
対他的一同性	2.84	0.82	2.96	0.89	3.07	0.86
心理社会的同一性	3.10	0.68	3.17	0.76	3.28	0.76
MEIS 合計	3.12	0.63	3.16	0.71	3.23	0.69
視野の広がり・出会い	3.86	0.59	3.91	0.66	3.88	0.61
義務・退屈感	3.04	0.70	3.29	0.70	3.12	0.62
知的好奇心	4.31	0.51	4.29	0.59	4.28	0.53
自己成長	4.15	0.77	4.14	0.75	4.14	0.67
学習意欲	3.53	0.68	3.57	0.74	3.22	0.63

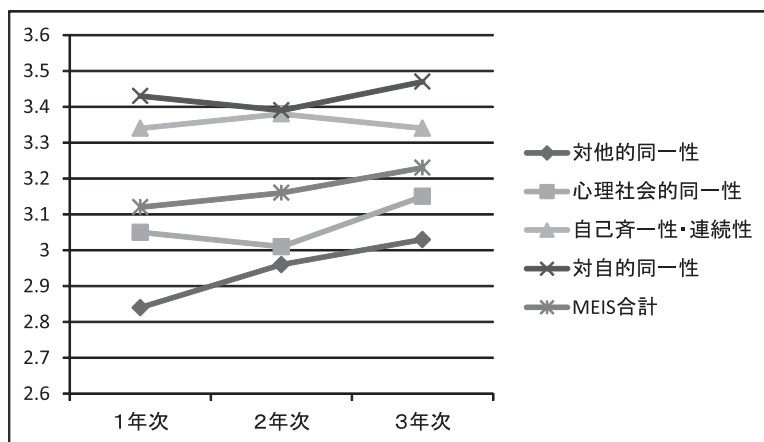


Fig. 1 1 年次から 3 年次のアイデンティティの変化

次に、学年ごとに各下位尺度間の相関係数を算出した (Table 2～ Table 4)。

1 年次において、対自的同一性は、授業観の全ての尺度、学習意欲の間に有意な相関がみられ、心理社会的同一性は知的好奇心以外の授業観の下位尺度、学習意欲に有意な相関がみられた。また、自己斉一性・連続性、対他的一同性には、義務・退屈感とのみ負の相関がみられた。2 年次においては、自己斉一性・連続性、心理社会的同一性と授業観の 4 尺度、学習意欲との間に有意な相関がみられた。さらに、対自的同一性は、自己成長以外の授業観の下位尺度、学習意欲の間に有意な相関がみられ、対他的一同性については、視野の広がり・出会い、義務・退屈感の間に有意な相関がみられた。3 年次においては、対自的同一性、心理社会的同一性と授業観の 4 尺度、学習意欲との間に、自己斉一性・連続性も自己成長以外の授業観と学習意欲に相関がみられた。対他的一同性は、視野の広がり、義務・退屈感との相関のみ有意であった。

Table 2 アイデンティティ, 授業観, 学習意欲の相関 (1 年次)

	自己斉一性 ・連続性	対自的 同一性	対他的 同一性	心理社会的 同一性
視野の広がり・出会い	-.042	.383**	.148	.227*
義務・退屈感	-.222*	-.431**	-.255**	-.310**
知的好奇心	-.009	.392**	-.031	.165 [†]
自己成長	-.008	.321**	.086	.212*
学習意欲	.092	.410**	.089	.362**

** $p < .01$ * $p < .05$ [†] $p < .10$

Table 3 アイデンティティ, 授業観, 学習意欲の相関 (2 年次)

	自己斉一性 ・連続性	対自的 同一性	対他的 同一性	心理社会的 同一性
視野の広がり・出会い	.307**	.271**	.258**	.427**
義務・退屈感	-.383**	-.439**	-.301**	-.439**
知的好奇心	.308**	.236*	.125	.263**
自己成長	.246*	.188 [†]	.181 [†]	.310**
学習意欲	.233*	.345**	.067	.315**

** $p < .01$ * $p < .05$ [†] $p < .10$

Table 4 アイデンティティ, 授業観, 学習意欲の相関 (3 年次)

	自己斉一性 ・連続性	対自的 同一性	対他的 同一性	心理社会的 同一性
視野の広がり・出会い	.302*	.393**	.234*	.515**
義務・退屈感	-.508**	-.483**	-.423**	-.390**
知的好奇心	.234*	.303**	.152	.358**
自己成長	.189	.268*	.162	.440**
学習意欲	.292*	.352**	.117	.370**

** $p < .01$ * $p < .05$

以上のことから、3 学年に共通する結果としては、対自的同一性、心理社会的同一性と授業観、学習意欲の間に関連がみられることが示され、とりわけ、自らの目指す方向や望んでいるものを明確に意識しており、自己と社会の適応的感觉が高い者は、肯定的な授業観をもち、学習意欲が高いということが示唆された。そして、どの学年においても、アイデンティティの全ての尺度と授業観の義務・退屈感との関連が強くみられ、アイデンティティの感覚を持っていない者ほど、授業に対する否定的な捉え方をしていたり、授業や学業に意味を見出せていない可能性が示唆される。また、水間 (2006) が述べるように、専門科目の学習過程でつまづくことにより、アイデンティティに揺らぎを生じさせてしまうとも言えるだろう。

アイデンティティの「対他的同一性」に関しては、他の 3 尺度の結果と異なる傾向を示し、「他者からみられている自分と自分が思う自分自身が一致している感覚があること」と学習意欲には全ての学年で関連がみられなかった。

学年による差異としては、1 年次において、授業観、学習意欲と、対自的同一性及び心理社

会的同一性から構成される「心理社会的自己同一性」にのみ関連がみられたが、2, 3年次では、これに加え、過去と現在の自己一致の感覚である自己斉一性・連続性とも関連がみられた。

学年による結果の差異がみられた理由として、大学2, 3年次は鶴田（2003）の学生生活サイクルの視点によると「中間期」に分類され、全体的な特徴として、学生生活への初期の適応が終わり、将来へ向けた選択が次第に近づいている時期、時間をかけて自分を見つめることが出来、学生生活を展開して自分らしさを探求する時期とされる。しかし、一方で、スランプや無気力、無関心に陥りやすく、将来の進路への不安が生じやすい時期であるとも言える。このことから、2, 3年次になると、よりアイデンティティの中核的な側面との関連が強くなっていくのではないかと考えられる。

白石・岡本（2005）や下山（1995）では、アイデンティティと授業に対する意欲の間に関連性が見出されなかったが、本研究では、アイデンティティの下位尺度、学年により、結果の差異はあるものの、授業に対する捉え方とは、アイデンティティとの関連性が示されたといえる。

2. 学年によるアイデンティティと大学生活に関する諸変数の相関関係

大学観については、杉浦・尾崎・溝上（2003）をもとに、大学満足感尺度に関しては、松島・尾崎（2012）の因子分析結果をもとに、各学年による下位尺度得点を算出した（Table 5）。

Table 5 学年別 大学観, 大学満足感, 進路意識の記述統計

	1 年次 (n = 112)		2 年次 (n = 109)		3 年次 (n = 72)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
出会いの場	4.13	0.77	4.15	0.70	4.10	0.75
消極的モラトリアムを過ごす場	2.75	0.88	3.24	0.95	3.29	1.00
勉強の場	4.37	0.54	4.42	0.51	4.49	0.46
自分探しの場	4.08	0.74	4.17	0.64	4.17	0.64
将来準備の場	4.01	0.64	4.12	0.58	4.06	0.54
学業満足感	3.64	0.69	3.68	0.77	3.85	0.70
大学生活満足感	3.92	0.89	4.07	0.60	3.90	0.88
進路検討	3.93	1.02	3.89	1.00	4.28	0.77
進路決定	3.71	1.20	3.81	1.03	3.94	0.90
進路行動	2.97	1.17	3.17	1.23	3.58	1.06

次に、アイデンティティと大学観、大学満足感、進路意識との相関係数を学年ごとに算出した（Table 6～Table 8）。

（1）アイデンティティと大学観

大学観について、1年次では、対自的同一性と大学観の勉強の場、自分探しの場に相関がみられ、対他的同一性と出会いの場、心理社会的同一性と勉強の場の間にもそれぞれ有意な相関がみられたが、それ以外の変数間には有意な相関はみられなかった。2年次においては、1年次に比べるとアイデンティティと大学観の関連が強くなり、アイデンティティの全ての尺度と授業観の出会いの場、消極的モラトリアムを過ごす場の間に有意な相関がみられた。加えて、

自己斉一性・連続性と自分探しの場の間に、対自的同一性と勉強の場の間に、心理社会的同一性と勉強の場、自分探しの場の間に有意な相関がみられた。3年次においては、自己斉一性・連続性と消極的モラトリウムを過ごす場、自分探しの場の間に、対他的同一性と消極的モラトリウムを過ごす場、自分探しの場の間に、心理社会的同一性と勉強の場、自分探しの場、将来準備の場にそれぞれ有意な相関がみられた。大学観についても、学習意欲・授業観と同様に、1年次と2，3年次との間に結果の差異がみられ、1年次ではあまり関連がみられなかった自己斉一性・連続性、対他的同一性の間に2，3年次では有意な相関が得られ、2，3年次の方がアイデンティティとの関連が強くみられる結果が示された。

1年次は、学生サイクルの視点（鶴田，2001）では「入学期」にあたり、不本意入学や学生生活への適応など、この時期特有の特徴を有している。また、松島・尾崎（2006）では、1年前期に授業への意欲が低下したと回答する者が多く、その理由として、入学前に抱いていた授業への期待とギャップが挙げられていたことを明らかにしている。半澤（2004）も、入学前後において、学業に対するイメージギャップが生じることが示されている。1年次では、2，3年次に比べ、アイデンティティとの関連はそれほど強くみられず、今回扱っていない大学生生活への移行に伴うところの変数（例えば、進学動機や入学前後の期待感のギャップ等）と関連する可能性があるのではないかと考えられるが、今後の検討が必要である。

（2）アイデンティティと大学満足感

大学満足感について、1年次では、アイデンティティの4尺度と大学生生活満足感の間に有意な相関がみられた。学業満足感については、「心理社会的自己同一性」を構成する対自的同一性、心理社会的同一性との間に有意な相関がみられた。2年次では、アイデンティティの4尺度と学業満足感の間に有意な相関がみられ、大学生生活満足感についても、対自的同一性以外の3尺度と相関がみられた。3年次では、自己斉一性・連続性、対自的同一性、心理社会的同一性と学業満足感、自己斉一性、対他的同一性、心理社会的同一性と大学生生活満足感の間に相関がみられた。3学年に共通して、学業満足感とは「心理社会的自己同一性」を構成する、対自的同一性、心理社会的同一性との相関が強く、一方、大学生生活満足感は、「中核的同一性」を構成する「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」との相関が強いことが示された。

大学生生活満足感は、「友達といると楽しい」「これからも今の学科のメンバーとずっと一緒にいたい」等の項目から構成されていることから、基本的信頼感と密接に関連していることが指摘されている「中核的同一性」（谷，2008a）との相関がより強かったのではないと思われる。一方、学業満足感は基本的信頼感よりも、むしろ自分の目的がはっきりしていること、自分が社会の中で自分らしく生きていけるか、自分が社会の中で適応出来るかの見通しをもてるかどうか学業への満足に影響しているのではないかと考えられる。

以上のことから、アイデンティティを獲得している者ほど、学業及び大学生生活全体の満足感も高い傾向がみられた。これは、アイデンティティと友人関係及び学業満足感の関連を示した仲野・壺井（2008）、アイデンティティを獲得している者は、成熟した対人関係を持つことを

示した Berzonsky&Kuk (2005)、アイデンティティと大学意欲低下の関連を明らかにした鉄島 (1993)、下山 (1995)、白石・岡本 (2005) ととも一致する結果であり、さらに、友人との深い関わりを回避する関わり方が、「対他的同一性」「自己斉一性・連続性」に負の影響を与えるという結果 (松下・吉田, 2009) ととも一致した。アイデンティティの感覚をもっている者ほど、学業にも大学生活自体にも満足感を示し、また大学生活において、学業や大学生活に満足している者のアイデンティティ形成が促される可能性を示唆する結果となった。

(3) アイデンティティと進路意識

進路意識に関しては、1 年次において、対自的同一性と進路検討、進路決定、進路行動全ての項目と有意な相関を示し、対他的同一性と進路検討、進路決定、心理社会的同一性と進路行動の間にも相関がみられた。2 年次においては、対自的同一性と進路に関する 3 項目全てと相関がみられ、心理社会的同一性は、進路検討と進路決定の間に相関がみられた。3 年次においては、心理社会的同一性と進路に関する 3 項目の間に有意な相関がみられ、対自的同一性は、進路決定、進路行動の間に有意な相関がみられた。

3 学年に共通して、対自的同一性、心理社会的同一性、つまり「心理社会的自己同一性」と進路に関する項目との相関が強かった。このことは、「心理社会的自己同一性」の感覚は、「現実、社会に接触、直面することによって形成されるアイデンティティの感覚 (谷, 2008a)」という指摘とも一致しているといえる。

また、学年が上がるにつれて、自分の目標が明確になる対自的同一性と進路意識との関連が強くなっており、さらに、現在、自分と社会との適応的な結びつきがあると考える者ほど、進路を決定して、進路に対する具体的な行動をとっている様子がうかがえる。加えて、1 年生のみ、対他的同一性と進路検討、進路決定の間に弱いながらも有意な相関がみられたことから、他学年に比べ、他者に受け入れられている感覚が進路意識に関連する可能性があると推測されるが、今後詳細に検討する必要がある。

Table 6 アイデンティティと大学観、大学満足感、進路意識の相関 (1 年次)

	自己斉一性 ・連続性	対自的 同一性	対他的 同一性	心理社会的 同一性
出会いの場	.046	.133	.337**	.024
消極的モラトリウムを過ごす場	-.149	-.132	-.009	-.129
勉強の場	.073	.272**	.041	.241*
自分探しの場	-.048	.215*	.140	.077
将来準備の場	.053	.085	.087	.135
学業満足感	.171	.501**	.175†	.350**
大学生活満足感	.341**	.330**	.472**	.362**
進路考え	-.044	.370**	.205*	.184†
進路決定	-.062	.375**	.239*	.166†
進路行動	-.017	.260**	.140	.197*

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

Table 7 アイデンティティと大学観、大学満足感、進路意識の相関（2年次）

	自己斉一性 ・連続性	対自的 同一性	対他的 同一性	心理社会的 同一性
出会いの場	.367**	.220*	.385**	.209*
消極的モラトリウムを過ごす場	-.385**	-.324**	-.233*	-.256**
勉強の場	.135	.268**	.017	.208*
自分探しの場	.253**	.164 [†]	.129	.234*
将来準備の場	.116	.048	.155	.096
学業満足感	.357**	.389**	.235*	.481**
大学生活満足感	.364**	.183 [†]	.370**	.289**
進路検討	.089	.405**	-.004	.302**
進路決定	.076	.423**	.112	.306**
進路行動	-.090	.344**	-.102	.152

** $p < .01$ * $p < .05$ [†] $p < .10$

Table 8 アイデンティティと大学観、大学満足感、進路意識の相関（3年次）

	自己斉一性 ・連続性	対自的 同一性	対他的 同一性	心理社会的 同一性
出会いの場	.210 [†]	-.031	.213 [†]	.167
消極的モラトリウムを過ごす場	-.427**	-.164	-.309**	-.173
勉強の場	.132	.214 [†]	-.003	.271*
自分探しの場	.272*	.223 [†]	.277*	.424**
将来準備の場	.066	.197 [†]	.044	.384**
学業満足感	.237*	.441**	.092	.407**
大学生活満足感	.423**	.194	.284*	.327**
進路考え	.154	.227 [†]	.127	.307**
進路決定	.090	.525**	.052	.293*
進路行動	.122	.519**	-.005	.247*

** $p < .01$ * $p < .05$ [†] $p < .10$

まとめと今後の課題

本研究では、大学生を対象に、アイデンティティと学業に関する変数、大学生活全般に関する変数との関連を検討することが目的であった。本研究の結果より、全体としては、自我同一性の感覚を持っている学生ほど、大学の授業の場について、自身の視野を広げ、知的好奇心を高める場所という肯定的な意味づけをしており、学習意欲も高かった。大学での学業により、アイデンティティが形成されたり、明確な目的や方向性を持つことにより学習意欲を高め、積極的な学習や大学生活に対する捉え方へとつながっていることを示唆している。さらに、アイデンティティの感覚をもっているほど、大学における満足感が高く、将来の進路に対する意識をもち、さらに進路に対する具体的な行動をとっている様子が窺えた。しかし、学年ごとにみると、アイデンティティの4つの次元により結果に差異がみられ、1年次と比べると、2、3年次において、よりアイデンティティとの関連が強く示され、関連するアイデンティティの次

元の幅が広がっているようであった。これは、学年ごとに異なる心理・社会的な課題があり、特に2, 3年次においては、自分らしさや将来に対する思案など、アイデンティティの探求の問題が学生生活と密接に関連してくることが示唆される。

今後の課題として、本研究では上記の様に、授業観や大学観等、授業や大学生活に対する意識は尋ねたものの、実際にどの様な大学生活での取り組み、活動がアイデンティティの形成や確立につながっていくのか、そして、アイデンティティを獲得することで、大学生は自身の大学生活をどの様に再評価するようになるのか、今後詳細な検討が必要である。

また、本尺度で使用した多次元同一性尺度 (MEIS) について、尺度合計点は、青年期後期において、徐々に高まっていくことが示されている (谷, 2001) が、4つのアイデンティティの次元について、発達的な観点から検討されている研究はほとんどみられない。今後、4次元の発達の変化についても検討を行う必要がある。

引用文献

- Berger, K.S. 1998 *The Developing Person Through the Life Span*. Worth 4th ed.
- Berzonsky, M. D. 1989 The self as a theorist: Individual differences in identity formation. *International Journal of Personal Construct Psychology*, 2, 373-376.
- Berzonsky, M. D. & Kuk, L.S. 2005 Identity style, psychosocial maturity, and academic performance. *Personality and Individual Differences*, 39, 235-247.
- Faye, C. & Sharpe, D. 2008 Academic Motivation in University: The Role of Basic Psychological Needs and Identity Formation. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 40, 189-199.
- 半澤礼之 2004 大学生の学業環境に対する適応 (2): 新入生は学業に対する不満・問題にどのように対処しているのか 日本教育心理学会第46回大会発表論文集, p.483.
- 畑野快 2010 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性 教育心理学研究, 58, 404-413.
- 小林邦雄 2010 大学生の「意欲」に関する一研究 近畿大学生物理工学部紀要, 25, 25-40.
- 松島るみ・尾崎仁美 2009 大学生における学習意欲の変化を規定する要因一横断的・縦断的方法による検討 プシュケー, 8, 13-34.
- 松島るみ・尾崎仁美 2012 アイデンティティと大学生活の関連について (1) 日本心理学会第76回大会発表論文集, p.1022.
- 松下姫歌・吉田愛 2009 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究, 9, 207-216.
- 水間玲子 2006 大学生のアイデンティティ発達における専門教育の意義について一心理学専攻の学生を対象に一 京都大学高等教育研究, 12, 1-14.
- 仲野好重・壺井康仁 2008 学生生活の満足感とアイデンティティ形成の間をつなぐもの一充実感からのアプローチ 大手前大学論集, 9, 227-252.
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究: 現代日本青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 尾崎仁美・松島るみ 2006 大学生の授業意欲の変化とその要因 プシュケー, 5, 63-74.
- 尾崎仁美・松島るみ 2009 大学授業観と大学適応感、学習意欲、学業的自己疎外感との関連: 大学授業

- 観尺度の作成と大学授業観タイプによる検討 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 39, 1-16.
- 尾崎仁美・松島るみ 2012 アイデンティティと大学生活の関連について(2) 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1023.
- 佐方哲彦 2004 病理的なアイデンティティの形成メカニズム 谷冬彦・宮下一博(編) さまよえる青少年の心—アイデンティティの病理 北大路書房, pp.11-24.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 白石尚大・岡本祐子 2005 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達、家族機能の関連性 青年心理学研究, 17, 1-13.
- 杉浦健・尾崎仁美・溝上慎一 2003 大学は何をする場所?(1) —大学生の大学観と大学生のあり方との関連について— 日本心理学会第67回大会発表論文集, p.1198
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 谷冬彦 2004 アイデンティティの定義 谷冬彦・宮下一博(編) さまよえる青少年の心—アイデンティティの病理 北大路書房, pp.2-4.
- 谷冬彦 2008a アイデンティティのとらえ方 岡田努・榎本博明(編) 自己心理学5 パーソナリティ心理学へのアプローチ 金子書房, pp.6-21.
- 谷冬彦 2008b 自我同一性の人格発達心理学 ナカニシヤ出版
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究: 関連する諸要因の検討 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 鶴田和美 2001 学生のための心理相談 培風館
- 鶴田和美 2003 学生相談における学生生活サイクル研究の位置づけと課題 名古屋大学学生相談センター紀要, 3, 16-24.
- 和田実・森本紗世・山内みずき・菱沼彩・古川正章 1998 大学新入生の入学前の意欲は、入学後、達成されるか?—東京学芸大学新入生の場合— 東京学芸大学紀要1部門, 49, 133-141.
- 山田剛史 2004 現代大学生における自己形成とアイデンティティ: 日常的活動とその文脈の観点から 教育心理学研究, 52, 402-413.
- 吉村斉 2004 女子学生の専門就職意欲および学生生活への満足を規定する要因—自己表現と小集団閉鎖性に注目して— 青年心理学研究, 16, 1-14.